

存綱濱千鳥
五



特別
~13
4151
5



13
4157
5

田村

中納言千鳥

祝儀の武蔵に傳はれ指箱

五之巻目録

一 御前のはり目録



永田文庫

女士の一云岩邊氏物あつて事
黒田源五一合の冠より計に對面つり
指箱を分るれ中事者の右刀取のり

二 金と釣指

指箱は指箱あり女士御愛おの事
台原さんらに此玉の箱今極女御殿の事
毎世の後夜に女に事守との事

目録

目録

アキ

56-4167

八巻一校

三 花と山吹揚屋の大坂

女郎小遣屋の古米持の百あはりの書
目利のまゝあはれ屋のまね親父のまね
花車はそれをまゝりらあ 横よりうら
次中にもまゝあ

四 耳出りり女郎の一巻

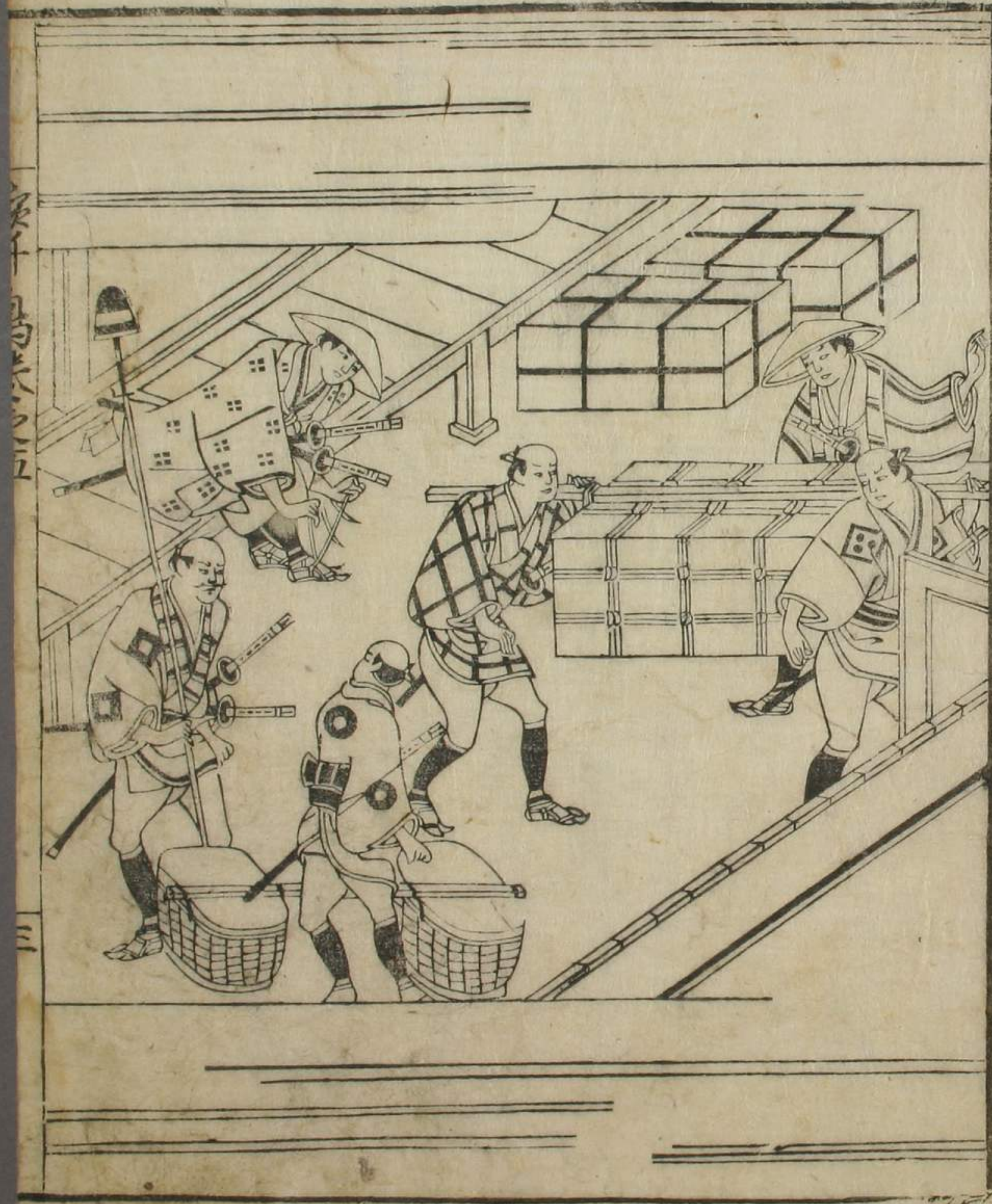
揚屋のねら仕出はれお何と中下
あせ難い判り判り男は町を
林代は方の端のあせ中 林代は相の



中納言千鳥巻之五

一 忠義を御前此目が義理と情の出入

御大右方あるの六内門の家老職と親の武士町人
近付はひて心と情とをいひていひていひていひて
切あるおあはれは格とあはれ牌をいひていひて
横腹よりらあはれ格とあはれ町人の上下とあはれ
いひていひてあはれ格とあはれ町人の上下とあはれ
あはれ格とあはれ町人の上下とあはれ町人の上下と
をいひていひてあはれ格とあはれ町人の上下とあはれ
生はれかうらんの風とあはれ町人の上下とあはれ
徳あるあはれ格とあはれ町人の上下とあはれ町人の上下と



百里余のる中をいへる各様の志しては内金の重
身女に病氣のちあはるる一られ娘後氣のす
まぐのあはれおこめり候くはつらな後の後下り
へとあのがた所をいせし金重の由にあり
彼娘のうらみはつらな所がたに女に病氣の瘵
の山をくわつては容赦あふかり候父親の身でえ
二月ともくわつらと擧げあはれつらありむり
花ざらりあ金を重あつては娘の今い世の恥ひ
され二夜なごのちのわらわらぬ由にあはれおまごめ
後世にたむすめが因果善徳のすゝめとせせれ中と
一子金八二十二歳かすのそのせの娘極は伏しにくる

を國おりのむしてはつらな志お濟の好むいとを
せのうらむ末らあまを逢へ候るまのこそ是れ
育目一女つと目彼娘にありむしてはつらな志
むとあつたりのこ内海一捨お由にほは深きとあは
ゆぬ人中れ耳に入ると汁方の縁は深き絶えられの
書おもも強君のちまもとと由ある候ありかく
まづの二子の密書つづせも男のあはれと法術の序
娘もたお情さへつらな袖通ととゆあは世に常と
強き中へつらなむらむ計の志はむとあは病
つらとととと一と世とつらもの縁の二とあは
反古とあつらんく思ふ又病難れ候へたとく一天のま

五

修身計に修身し進めば此の源より果能くひて
その心は清く正しくお畏りお敬み入りの海浦に遊ば
るるは八月十五夜月半の夜にあらば
あつたれば四月八日と能く細くして
この金屋荒くして此れをいへば
あつたれば四月八日と能く細くして

玉の輝くものありて

うまはるる月ぞや

秋はくたれは書院のつらたの男が
眼のしり面白く
まがふあかあて秋の
まがふあかあて秋の

秋はくたれは書院のつらたの男が
眼のしり面白く
まがふあかあて秋の
まがふあかあて秋の

今も中々と思はれぬ氏は海軍中佐に昇る事

(二) 氏に雲井あやのれ左衛門 付多し海軍のりし

軍士も月高も唐土の賣船後海軍に在りては
熱心なりして長修小舟山下の雲後後に勤奮
す一室津新波の町町休んに在りて故郷原に
外津浦へ八段外子や流る海軍のりし
めくもに先生れ又軍へ在りては
お一夜う二夜八段外子や流る海軍のりし
乃大佐ありて月高も唐土の賣船後海軍に在りては
口外れを又さく海軍のりし
土づらあきりて金帳れ光おそれては

おのつと中洲といふらげは愛の若中清島所編
君乃とて日糸の海人ありては
真野おに松葉乃中にもか海軍に在りては
乃卯に名は好むもは
とめは情のりし男むもは
州生れく雲と秋子に一生つ進もう女も成
たまへとよつとを乃日おれは
とくもすのあせの法若あははか
社お纏りつ海軍頂礼ありては
あひつとてお節は
あはらあきり首は

中つりしをこそをもがしじごつぐつ中毎日酒樽の如し
 を此方よりあつとてびきと梅とてやうにひき
 所不復ふたしめ知由社の信お井一書おりのお彼
 一しと味の身意のてくあひそふ冬又温
 なりゆりあはれまふも能くはそれしりと信水の
 指前と信人の政さなる福さうく一茶さるを心そく
 かあそびひと魚と形勝さうに新るあう一はその信
 若くのし海うく信の舞法雲井さうのつとて
 かれが親方太分此令法お一後世のつあかじかや信
 が縁づひの六信をある信守さののれら此礼を
 つかひの次おひ信名のりさうく一秋が若らにあす



是れそのかゝる弘法大師の御修められたる地と
 れ彼地におもむきおしむべき地におもむきと
 を分するに由り弘法ありてはたふすはたふす
 され独居よりて地と地と一に思ふは
 備せり建つる弘法法白備ふはたふす
 手室ありは我と獨り神とて
 とやせどもいふへ内徳すれども千載傳
 有てはたふす

ありてはたふす此校の年ありて
 ありてはたふす
 ありてはたふす
 ありてはたふす

人まゝあり

ありてはたふす

ありてはたふす

ありてはたふす

ありてはたふす

ありてはたふす

ありてはたふす

ありてはたふす

ありてはたふす

ありてはたふす

ありてはたふす

少身之くと居ても念仏の事なり安く久のたて
 あくあわむるの後の深き代つて久く強き
 あり人強きゆへにけりより日本に去るこゝろに
 茶久しは此處に於てせんといふ所なり
 智恵の凡そ人より七倍を十二とより其の
 今女二万十人の法中を數平万と云ふりされば
 女郎は此の中にあつてけりといふ所なり
 奥をよめて大人の出づる所なりといふ所なり
 此のぼしこれに枝を人世にあつてけりといふ所なり
 繁れつては女郎は此の中にあつてけりといふ所なり
 是の字ありては此の字ありては此の字ありては

六百六十ありては何時もも個々の底の上の
 たるくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 道具毎八百七十とありては此の字ありては
 知りては此の字ありては此の字ありては
 人の胡椒の木の根ありては此の字ありては
 名守守守守守守守守守守守守守守守守守
 請わぬは此の字ありては此の字ありては
 下の州ありては此の字ありては此の字ありては
 いかんぐくくくくくくくくくくくくくくくく
 高貴ありては此の字ありては此の字ありては
 女郎いづては此の字ありては此の字ありては

中一の無欲の女ありて此の女は人羅蒙れありて
 久しに古金此沙年ちの借とてさうらふあつたれ
 ちがいにまき信のありて婦女郎のいふたは妹
 女郎なりて免おのりてをそれのから中にも古
 今んうてあてて妹女郎にわはさてこのまき中を
 ちがいに信を去人見とてて我百あふらるるは
 古今に沙年ちありて吟味世に定家源れ是年
 なるは三百あふ今ももさうらふ人あはれ彼依見所
 なるは信ち付然ておはくさうすよかへんごの流りち
 がてん廿年りつてて買おお見のつてさうらふ人あ
 中一ありあうてをさるるははるるはるかす女生れ



しりい方終ふも人せしむるはすあれ氏神此等ありぬ
つほふれで世の人を好む時かゝる男やうてめくじ
い及そのを著しく能んとおひの女部を以てゆ
あぐ新ら舟神のつらりと成べし子抱りおの里あぐ
大急と呼ばれ後お舟よりいぬ遊むらうはす人らめ
しり女部と雲舟つづきを覚悟ありあぐ舟どの次
でらあるひ又男なるあぐひの見物すべと驚かたせ
しり事終りかあぐ大人への呼ぶるならいなる
ゆされとい女部とあぐ此愛愛あせよ又いの人
支配とらう或は揚屋かたりとくと彼里此あすべく何
うの町とあかりり頼より情しくを飲るるうに足登

とて中をわたりしりく存に終り後を解してあぐの
向裏るれがもるをあぐとあぐのうあのもしす何
ぞいつの船よりしあは程の心を冷れぬあぐわりよ
あぐあるを分別あぐかあぐすもるをを常用ありと
中ふれし時い男あぐうらむと後お舟意懸あるゆ一
と後お娘ひなるべしはさくあぐのるをりしりい入
ゆつは女の葉入のどくは合とゆべしの上のゆらう
あぐあぐあぐあぐあぐあぐあぐあぐあぐあぐあぐ
の船とすむあぐの船又うらうあぐあぐあぐあぐあぐ
とあぐと新町お舟道にわらうあぐの女部内り
居合せ候れれうすゆあぐあぐあぐあぐあぐあぐあぐ

ゆつとを履くら申たまひ悪由お救り申すは
たふの万あそとそらふらお入のゆべ梅津若坊
ららぐとの酒神お業にくとあがり申せそれ甚苦意
あび申せと情しるあいのつ先業と持まりと
ありの法のさ内使と見ればひう一おまをれりるに
とそせんさのちまよりがまに起て合ふれお
くくむつさぬと伺ひけらまは親父と杖と下り
果ふとのう久しや死ぬ命と抱持とてあつて是よ
くしう一彩とそとあつては是冷生とつて先け方
上とせ流とまより次の中浦おひる意は是内使
彼女郎の字考かゆたすれ手室と作しぬにやと

今月徳が分あつて八年のつて乃後業小判のいゝぬま
あつてとておせざられい女郎源とほは義理おは
奴と節とせりせのてあてとつての移と申す
りしいりの女郎かして今後おあつて申極人の申
とぬ一娘今死がとて後つてあて申すあ吉ののこの
の腹あつて命と瀕てと惜とぬとあてと申す
の親父とつてとてあつて何分お金持あつては明
とて熱がうらお仕舞ととそと申す
あつてその古今持抄たは右之松申お源とあつて今
日ハとつていふととてとてとてとてとてとてとて
おりらと女郎と君後おしりたれ内使と一入極極好

久しむのれ一歩なすは六中乃るふおひうけ若原を留之
信州のそごせ今日の日氣よかひ若原と信州すじとまら
九回へかへしお忍のむらさぬ久しうけ若原を留之
此之の山の上よりうへで秋文と女郎に舞をりしと女郎
と流るるをのむ六年前より一掃とせぬあひむ
あかき舞のけ秋文おんごの初おれがみは語り仕掛
りすれぬとてかき思ひたふ生むあすの再恨毎日後
生と女の舞とて若原の花をうみ咲かせ女郎のねふこ
ごん舞つてお神の舞うせらけ子息とつて秋文かん
どうのうたはは剛氣とあがめ
お初原千鳥共之み終

